AJCC研究会
2022年7月研究発表

＞＞　ウクライナのカメラ　＜＜

会員番号0954　小松輝之

小松会員による研究発表の様子

いま、ウクライナに世界の耳目が集まっている。旧ソビエト連邦を構成していた時代から、主要な穀倉地帯であり、また工業化が進んだ地域であった。元はと言えば、9世紀、日本の平安時代に成立したキエフ大公国に発し、かの勇敢なコサック騎兵団の故郷でもある。

ここではそんなウクライナで作られたカメラたちを紹介してみよう。1917年に勃発したソビエト革命。その指導的役割を果たしたトロッキー、レーニンとともに歴史に名を残したのが、ジェルジンスキー(Feliks Edmundovich Dzerzhinskii)である(写真 1)。有名な秘密警察KGBの初代長官とされ、ソビエト連邦の成立に功績があったが、1926年に議会での演説のあと突然倒れ、48才の若さでこの世を去った。

このジェルジンスキーは、秘密警察の長官でありながら大衆に人気があったようで、出身地のポーランドや、ロシア、ウクライナなどに彼を記念して、彼の名を冠した道路や博物館が数多く残された。その中のひとつがウクライナのハリコフ市に作られた孤児院である。その孤児院は彼を記念して、彼の名前の頭文字をとってFEDと名付けられた(写真 2)。

この孤児院にある日、党中央からライカが届いた。プレゼントではない。このライカとそっくり同じカメラを作れという命令だった。孤児たちは懸命に取り組んで、1932年に最初のコピーライカを作った。のちにオリジナル・フェドと呼ばれるカメラだ。軍艦部などのエッジはシャープさは無く、手作り感をぬぐえない。アクセサリーシュー取り付け部の凹みはあるが、アクセサリーシューは付いていない。

この試作機は最初30台作られたという。その後も約2年にわたって数百台が作られた。中古カメラ市場では珍品とされ、最初の30台は百万円以上の値が付くという(写真 3)。

1934年から本格的な量産体制に入り、後にFED-1(写真 4)と呼ばれるこのモデルは、戦争を挟んで20年間にわたって77万7千台生産された。そのうち60万台は大戦後の生産である。戦前作られたFEDはフランジバックが微妙にライカと違っていて、ライカのレンズは装着は出来るがピントが合わない。戦後のモデルはライカと同じフランジバック長さに修正されている。このFEDの工場は、大祖国戦争(第2次世界大戦)で戦災にあったが、戦後いち早く復興して戦後経済に寄与したと評価されて、赤軍勲章を授与されている。

写真 3 オリジナル・フェド、アクセサリーシューが無い

写真 1 ソ連革命70周年記念切手(1987年)
左からトロッキー、レーニン、ジェルジンスキー

写真 2 FED孤児院 (院内で作業する孤児達)

写真 4　FED-1

写真 5　FED-2

写真 6　FED-2 Yamato

1955年から1970年まで作られたFED-2（写真 5）は、500万台以上生産された。おそらく世界で最も大量に作られたライカ型カメラだろう。距離計と兼用にした一眼式ビューファインダーに進化している。数多く作られたので、バリエーションも多く、シンクロが付いたもの、セルフタイマーが追加されたものなど、5種類ほど有るようだ。

ウクライナ人は遊び心がある民族だ。ネットオークションのebayで見つけたのは、なんと戦艦大和をテーマにしたカメラ（写真 6）だった。黒塗りのボディーに金色で大和が描かれている。実に丁寧に描かれていて、日本人は嬉しくなってしまう。同じようにイギリス人のために、戦艦キング・ジョージ5世、ドイツ人には飛行船ヒンデンブルクを用意した。商売気もなかなかしたたかなのである。

1963年に発売されたFED-3はレバー巻き上げになり、軍艦部もすっきりと整理されて、ぐっと洗練されたモデルになった（写真 7）。

このFED-3をベースに、すばらしい彩色を施したカメラを見つけた（写真 8）。とてもカメラには見えない。一瞬、金属では無く陶磁器で出来ていると思わせる工芸品だ。これはロシアのグジェリ地方に伝わるグジェリ焼きの技法で、彩色されているという（写真 9）。

1945年5月、ソ連は連合国とともにナチスドイツに戦勝した。ソ連では大祖国戦争と呼ばれている。この戦勝によりソ連は東ドイツを占領した。そこには光学機器の大手カール・ツァイスのあるイエナ市と、その傘下でカメラメーカーのツァイス・イコンのあるドレスデン市が含まれていた。そこへ進駐したソ連軍は、さっそくカール・ツァイスと、ツァイス・イコンの工場（写真 10）を接収した。

写真 7　レバー巻き上げとなったFED-3

カメラ工場を接収したソ連軍は、コンタックスの生産設備、部品、技術者をいったんイエナ市に運び、コンタックスそっくりの、いやネームをKIEVに変えただけのコンタックスを作った。レンズはもちろんツァイスのゾナーだ。1年ほどイエナ市でコンタックスの組み立てを練習して、あとは、当時ソ連領だったウクライナのキエフ市の軍需工場アーセナル社へ、生産設備と部品を運び入れた。

そこで、コンタックス2型（写真 11）はキエフ2型（写真 12）に生まれ変わった。1947年のことであった。生産設備も部品もコンタックス用なのだから、このキエフはコンタックスそのものと言って良い。

さて、1950年代に入ると、ドレスデン市から接収した部品も底をついた。そこで、部品をアーセナル社で作り始めた。この時代のキエフをキエフ3型と呼ぶ。さらに1957年にシンクロ接点が追加され、露出計を軍艦部に乗せたKIEV-4型、露出計が無いモデルKIEV-4A型を世に出した。このモデルはバリエーションが多く、写真 13のカメラはキエフ4A型だがシンクロ接点が無い。

写真 8　グジェリ焼風FED-3

写真 9　グジェリ焼

写真 11 コンタックス 2型

写真 12　キエフ 2型

写真 13　キエフ　4A型

写真 10　ツァイス・イコンの工場（コンタックス等を開発／製造した旧イカ A.G.の工場）

写真 14 上 コンタックス 2、下キエフ 4A
コンタックスにある巻戻しボタンがキエフにはない

写真 15 赤い点にノブを合わせると巻戻せる

写真 16 キエフ 10

私の手元にある4A型はかなり変わっていて、撮影が終わってフィルムを巻き戻そうとしたら、巻戻しボタンが見つからない(写真14)。コンタックスには底蓋に大きなボタンが付いている。底蓋をよく見ると、底蓋脱着ノブの巻き上げ側に赤い点を見つけた。ノブをその赤点に合わせたらロックが外れた、不思議なメカだ(写真 15)。

コンタックスの亜流を作り続けたキエフだったが、1965年に突然変異を遂げる。極めてユニークな一眼レフを登場させたのだ。シャッター優先AE一眼レフKIEV-10(写真 16)である。コニカオートレックスよりわずかに早く発売されたが、当時のソ連の情報は西側に伝わりにくく、しばらくの間、コニカが世界初のAE一眼レフとされてきた。このキエフ10は巨大なセレン電池でシャッターを制御する。

写真 17、18 キエフ 10の金属フォーカルプレーンシャッターとシャッター部分の拡大写真

キエフ10は、さらにユニークなシャッターを搭載している(写真 17、18)。金属のフォーカルプレーンシャッターなのだが、なんと扇形に回転する。前板3枚、後板3枚が扇型に回転するのだ。こんなシャッターを誰が考えついたのだろう。おまけに金属膜はピカピカに光っている。これは、光を嫌うカメラの機構としてはタブーだろう。

さらに、このカメラは宇宙を飛んだカメラでもある。1962年のアメリカのマーキュリー計画で、ハッセルブラッドとミノルタ・ハイマティックが世界で初めて宇宙へ行ったカメラとして有名だが、宇宙船から外に出ることはなかった。1965年、ボスホート2号で宇宙へ飛んだアレクセイ・レオーノフは、このキエフ10を持って、宇宙遊泳をしたのだ。つまり、世界で初めて宇宙船を飛び出して、大宇宙を遊泳したカメラというわけだ(写真 19)。

写真 19 1965年世界で初めて宇宙遊泳をしたキエフ 10

私はこのキエフ10にミール20mmF3.5をつけて撮るのが愉しい(写真 20)。大口径の巨大なレンズで、超広角の風景を狙うと、全く違った世界が見える。このカメラの楽しみの一つなのだ。

最後に嬉しい報告をする。今年2022年6月20日に戦禍の中のウクライナのショップが、国際オークションebayにきれいなキエフ2を出品していた。思わず落札のボタンを押した。戦禍の中だからとあまり期待していなかったが、なんと2日後の6月22には現地を発送され、7月6日には我が家に届いた(写真 21)。

これは少し感激。ウクライナの公共インフラは未だ機能していた。

多くの歴史を刻んできたウクライナ。早く平和を取り戻して欲しい。頑張れウクライナ。

(完)

写真 20 ミール20mm F3.5を付けたキエフ10

写真 21 ロシアとの戦争のさなか、無事ウクライナから届いたキエフ 2